

『三国志演義』の成立史に関する考察

～二十四卷系諸本に於ける「夏振宇本」の位置づけをめぐる～

陳 駿 千

一、はじめに

元末明初に成立したとされる長編歴史小説『三国志演義』は、世に問われてから現在までの数百年に渡り、中国のみならず、世界中に伝わり、莫大な人気を博している。それが故に、多くの出版業者は『三国志演義』を刊行し、様々な「版本」を作り出している。これらの版本の本文は、全体的におおよそ一致しているものの、一部のエピソードないし字句には、時々細かい異同が見られる。それらの細かい異同を手がかりに、現存している四十種近くある『演義』を検証し、系統付けようとする研究は既に多く蓄積されているが¹⁾、いまだ解決されていない問題も多数残されている。

中川諭氏の研究により、『三国志演義』諸本は、二十四卷系・二十卷系繁本・二十卷系簡本という三つの系統に分けることができ、それぞれ変貌を遂げてきたということが判明しているが²⁾、各系統間の相互関係や、同じ系統に属する諸版本間の関係などについて、まだ不明な点が多く残されている。本稿は、二十四卷系諸本の一つである「夏振宇本」³⁾に注目し、その成立の過程及びそれが二十四卷系諸本に占める位置をめぐる諸説を再考し、その解明を試みたものである。

二、先行研究及び問題の所在

夏振宇本の版本学に於ける位置づけについて、孫楷第氏は以下のように述べている。

(夏振宇本の) 内容も文字も、みな周曰校本と同じであり、周曰校本から派生してきたものであろう⁴⁾。

孫氏の判断に影響され、夏振宇本は単なる周曰校本の翻刻とみなされ、その版本学的価値が十分に認識されずにいた。しかし、上田望氏は、諸本文に見られる字句の違いを検証し、「従来周曰校本の焼き直しと見なされていた夏振宇本が周曰校本とは異本であり、しかも多少Ⅲ・Ⅳ群⁵⁾の『三国志伝』諸本に近いことが確かめられた。そして後の李卓吾批評本や毛宗崗本は夏振宇本か、もしくはそれとよく似た性格を持つテキストから発展していったと考えられよう⁶⁾」と主張している。魏安氏も、周曰校本は夏振宇本に近い版本を底本とし、嘉靖本を参照して改編された版本であると、上田氏に近い意見を述べている⁷⁾。そして中川諭氏は更に、「吳臣趙咨説曹丕」則において、周曰校本には脱文の部分があり、夏振宇本のその部分が嘉靖本と異なる事実を指摘し、「嘉靖本・周曰校本・夏振宇本の三本はどれかがどれかの底本となるというのではなく、横にならぶ関係にある。そして周曰校本と夏振宇本がより密接な関係にあるのであるが、夏振宇本は周曰校本よりも遅れる版本なのである」と指摘した⁸⁾。

しかし、後に中川氏は「これまでの夏振宇本についての研究は、三種類の周曰校本の存在が知られるようになったり、朝鮮覆刻本・活字本が発見されたりする以前のものであったため、それらとの関わりの中で考察されたものではない」と述べ、「吳臣趙咨説曹丕」則に見られる脱文を根拠に、「夏振宇本は、周曰校刊行の版本を元に成立したと考えられる」と主張し、新たな見解を示した⁹⁾。

このように、「夏振宇本は周曰校本の翻刻である」と主張する孫説・中川新説と、「夏振宇本と周曰校本とは異本である」と主張する上田説・魏説・中川旧説と、二つの相反する説がそれぞれ唱えられている。この問題を再考するために、まず双方の代表的な例証をもう一度確認しておく。

まずは、上田説の主要な例証を見てみよう。場面は、第74則「玄德風雪訪孔明」に、二度目に諸葛亮を訪れたがまた会えなかった劉備が帰ろうとすると、偶然諸葛亮の岳父である黄承彦に出会ったところである。黄承彦は、以下の詩を詠んでいた¹⁰⁾。

【例1】

嘉	空中乱雪飄	白髮銀系翁、豈懼皇天漏、騎驢過小橋、獨嘆梅花瘦。
周	○○○○○	○○○○○、○○○○祐、○○○○○、○○○○○。 【考証】古本作盛感皇天祐。
夏	長空雪乱○	○○老衰○、盡感○○祐、○○○○○、○○○○○。
笈	長空雪乱○	○○老衰○、盛感○○祐、×××××、×××××。
余	長空雪乱○	○○老衰○、盛感○○祐、×××××、×××××。

上田氏は、「[盡]は[盛]と字形が似ているために誤刻された可能性があり、夏振宇本の方が実は周日校本注の言う「古本」に近いのではないか」、「夏振宇本は二十卷本に近い要素をもっているのだが、それは後補によるものではない」とし、夏振宇本の本文は周日校本より古いと主張している。

続いて、中川新説の主要な例証を挙げる。場面は、夏振宇本巻九、第163則「吳臣趙咨説曹丕」に、劉備のもとへ使者として旅立った諸葛瑾の忠誠心について、張昭と孫権が議論するシーンである¹¹⁾。

【例2】

嘉靖本	却説、張昭入見孫權曰「諸葛子瑜知蜀兵勢大、故推作使而去、必降玄德矣。」權曰「不然。孤與子瑜有生死不易之盟。子瑜不負於孤、孤不負於子瑜也。昔日子瑜在柴桑時、孔明來吳、孤與子瑜曰……
朝鮮覆刻本	却説、張昭入見孫權曰「諸葛子瑜知蜀兵勢大、有生死不易之盟。子瑜不負於孤、孤不負於子瑜也。昔日子瑜在柴桑時、孔明來吳、孤語子瑜曰……

周曰校乙本	却說、張昭入見孫權曰「諸葛子瑜知蜀兵勢大、有生死不易之盟。子瑜不負於孤、孤不負於子瑜也。昔日子瑜在柴桑時、孔明來吳、孤與子瑜曰……」
夏振宇本	却說、張昭入見孫權曰「諸葛子瑜知蜀兵勢大、故假以講和為詞、欲背吳入蜀。此去比不回矣。」權曰「孤與子瑜有生死不易之盟。子瑜不負於孤、孤不負於子瑜也。昔日子瑜在柴桑時、孔明來吳、孤語子瑜曰……」
葉逢春本	却說張昭等見孫權而言曰「諸葛瑾知蜀兵勢大、故推作使而行、必降劉備矣。」權曰「子瑜決不負孤。彼與孤有生死之交、不易之誓。子瑜之不負孤、猶孤之不負子瑜也。昔者子瑜在柴桑時、孔明至吳、孤與子瑜曰……」

中川氏は、以下のように述べている。

嘉靖本は巻十七、葉逢春本は巻七。嘉靖本では、劉備のもとに使いに行った諸葛瑾について、張昭が孫權に「諸葛瑾は使いにかこつけて蜀に行ったので、きっと劉備に降るだろう」と言うと、孫權は「自分と諸葛瑾には死んでも変わらない絆がある」と述べる。これに対し朝鮮覆刻本・周曰校乙本では、嘉靖本の「故推作使而去、必降玄德矣。權曰、不然。孤與子瑜」の十九字が脱落して、本来張昭のセリフであったところが直接孫權のセリフにつながって、文章が読めなくなっている。系統を異にする葉逢春本では、多少の文字の異同が見られるけれども、おおよそ嘉靖本に一致していることから、嘉靖本のような文章がもとの形であろうと考えられる。そして夏振宇本を見ると、朝鮮覆刻本・周曰校乙本で脱落があった個所に「故假以講和為詞、欲背吳入蜀。此去比不回矣。權曰、孤與子瑜」の二十四字を補っている。夏振宇本で補われてた文字は、内容こそ嘉靖本と大きく変わらないが、そこに用いられている語句には違いがある。このように、夏振宇本では周曰校本の脱誤を独自に修正しているのである。この例は、夏振宇本が嘉靖本の文章を直接修正したものではなく、朝鮮覆刻本や周曰校

乙本のように脱誤のある文章を修正した結果であろう。すなわち夏振宇本は、周曰校刊行の版本を元に成立したと考えられる。

ちなみに、魏安氏が有力な論拠としている、周曰校本にのみ見られる「もともと宋代の地名が明代の地名に書き換えられている」という論考については、朝鮮覆刻本に於ける氏が挙げた個所を見ると、夏振宇本と一致して宋代の地名になっている。魏氏が参照している周曰校本はイェール大学蔵の乙本及び内閣文庫・蓬左文庫・台北蔵の丙本であり、その底本である甲本は検証していないからである¹²⁾。

ここで、中川新説をもう一度検討すると、どうしても腑に落ちないところが幾つかある。それを、以下の問題点にまとめる。

- 1) 周曰校甲本は現在残本しか残っていない。なおかつ中川氏が参照しているのはその朝鮮覆刻本であり、その内容は甲本と完全に一致しているわけではない。周曰校甲本全体に対する検証が不可能であるという状況において、たった一箇所脱文を根拠に、夏振宇本は周曰校甲本の翻刻であると断言するのは、早計の誇りを免れないであろう。
- 2) 【例2】に見られる脱誤の個所について、脱落が生じたのは周曰校本の段階であり、それ以前の段階ではない、と断定できる証拠は述べられていない。もし周曰校本に先立つ版本にもこのような脱文があるとすれば、夏振宇本の編者が本文を補う際に使っていた底本がその版本である可能性は十分にある。例えば、既に散逸している、周曰校本と夏振宇本の共通する祖本には脱文が既に生じており、夏振宇本は独自にそれを補完する一方、周曰校本が祖本を脱字のまま継承した、という可能性もある。中川新説の考証ではそれを排除することができない。

- 3) 中川新説は、【例1】を解釈することができない。もし夏振宇本が周曰校本の翻刻であれば、なぜ夏振宇本に見られる「梁父吟」の字句が、周曰校本が言う「古本」と一致しているのか。そもそも、周曰校本の「豈懼皇天祐」（どうして天のご加護を恐れるのか）というテキスト自体は意味が通っておらず、むしろ嘉靖本の「豈懼皇天漏」（どうして天が漏れる（ように大降りする）のを恐れるのか）と夏振宇本の「盡感皇天祐」（天のご加護をつくづく感謝する）が誤って混同されたものに見える。そうすると、周曰校本は夏振宇本と嘉靖本の中間段階にあり、逆に夏振宇本の翻刻ではないかと疑われる¹³⁾。
- 4) 中川新説を支える【例2】に相反す例も複数挙げられる。これについては、後文で詳論する。

『三国志演義』という百万字規模の長編作品の版本関係を検証するには、少数の個例だけでは信憑性がある結論を出すことは到底不可能であり、まずはより広い視点を以て作品全体を俯瞰してから、相当な数にのぼる個例を検証することによって、版本関係について論ずることが可能になる。本稿では、全体に対する分析と個例に対する検証を併用し、夏振宇本と周曰校本との関係の再考を試みる。

本稿が扱う『三国志演義』諸本は、以下のとおりである。

- 「夏振宇本」：名古屋蓬左文庫蔵本（陳翔華編影印本をも参考）。
- 「劉龍田本」：劉世徳・陳慶浩・石昌渝編『古本小説叢刊』第二一輯（中華書局、1991年）所収笈郵齋覆印本の影印。欠葉、破損等によって判読不能な箇所は、朱鼎臣本、黃正甫本（周文業氏によるデータベース所収の図像）を参考する。
- 「嘉靖本」：古本小説集成編輯委員会編『古本小説集成』第三輯（上

海古籍出版社、1992年）所収影印本。

- 「葉逢春本」：井上泰山編『三国志通俗演義史傳』（関西大学出版部、1997・1998年）影印本。原欠巻三、巻十、及び欠葉、破損等によって判読不能な個所は、双峰堂本（陳翔華編『日徳英蔵余象斗刊本批評三国志傳』、国家図書館出版社、2013年影印本）、聯輝堂本（名古屋市蓬左文庫蔵本、及び劉世徳・陳慶浩・石昌渝編『古本小説叢刊』第二二輯（中華書局、1991年）所収影印本）を参考する。
- 「周曰校甲本」：朴在淵・金敏智編『新刊校正古本大字音積三国志通俗演義』（学古房、2008年）影印本。欠葉、破損等によって判読不能な個所は、周曰校丙本（名古屋市蓬左文庫蔵本）及び朴・金両氏所編甲本の校訂部分を参考する。

三、誤植に対する統計による検証

夏振宇本の成立時期は万暦二十一年以降であり、周曰校甲本と乙本より遅いことは、既に論じられている¹⁴⁾。では、周曰校本に密接し、より遅く成立した夏振宇本は周曰校本の翻刻であろうか。

すでに述べたように、『三国志演義』という百万字にも及ぶ長編作品を検証するのに、少数の個例では信憑性のある結論に導くことができない。複数の版本の全体に対する比較を行い、ある程度全体像をつかんだ後、さらに相当数の個例を細かく検討することによって、より正確な結論に辿り着くことができるであろう。

しかし、全体に対する対照と言っても、むやみに全ての字句を対照すれば、莫大な時間と労力を費やすだけでなく、大量の「意味のない相違点」に吞み込まれ、価値のある手がかりが却って見にくくなる恐れもある。例えば、第1則「祭天地桃園結義」には、以下の文がある。

【例 3】¹⁵⁾

夏	竇武陳蕃預謀誅之，機事不密，反被曹節王甫所害。
周	○○○○○○○○○，○謀○○，○○○○○○○○○。

周日校本では「機謀」に作るところを、夏振宇本では「機事」に作る。しかし、「機謀」と「機事」とは同義語であり、どちらにしても意味が通る。たとえ二つの版本ともに「機謀」に作るとしても、版本上近い関係にあるとはいえない。

このような、抄写或いは製版の際に、職人が、ある言葉が無意識に同義の他の言葉に変えることは、むしろ日常茶飯事である。たとえば、夏振宇本・周日校本・嘉靖本それぞれの「祭天地桃園結義」則を対照すると、相違点を 42 箇所発見でき、その大部分は「意味のない相違点」と言わざるをえない。単純計算をすると、夏振宇本・周日校本・嘉靖本のみでも、相違点の数は一万を超える。現存する『三國志演義』の版本は 40 種近くあり、その組み合わせを計算すれば、相違点の数は天文学的数字になる。何らかの方法で、そのなかから「意味のある相違点」を見出し、それ以外を排除することができなければ、やがて情報に溺れ、真実から遠ざかる一方であろう。

さて、どのようなものが「意味のある相違点」と言えるか。一つの試みとして、「誤植に関わる相違点」が考えられよう。例えば、二つの版本のうち、一つの版本のテキストには誤植が認められ、もう一方は正確である場合、正確な方が修正後のテキストであるか、あるいは二つの版本がそれぞれ異なるルーツを継承しているなど、様々な可能性が考えられる。また、二つの版本に同じような誤植が認められる場合、同じ祖本の誤植を継承していると考えられ、版本上近い関係にある可能性が高くなる。その意味では、誤植を統計して分析すれば、「意味のある相違点」を多く発見できるはずである。本節では、誤植に対する分析を手がかりに、既存説を踏まえ、

夏振字本が『三国志演義』変遷史に占める位置を考察する。

夏振字本のテキストを点検する際、以下の基準によって誤植を統計した。

- 1) 字形・発音が近い他の文字に作り、意味が通らなくなる個所を「誤植」とする。ただし、通仮字（「羸羸」＝「勝つ」、「已以」＝「既に」など）は除外する。
- 2) 明らかな脱字、脱文、衍字、衍文によって意味が通らなくなる個所を「誤植」とする。
- 3) もともと架空の人名や地名（周倉、関索、鮑家莊など）や、史実と異なるが、ほとんどの版本で一致している固有名詞（張翼徳、宋憲、汜水関など）は除外する¹⁶⁾。

以上の基準で、夏振字本から誤植を463個所統計し、それを一箇所ずつ、周曰校本、葉逢春本、劉龍田本と対照した。以下、その統計データに基づき、夏振字本と他の三つの版本の関係について検証する。

まず、夏振字本の誤植が、三つの版本と一致する状況は下の表の示す通りである。

	同誤	誤にして不同	正確	比較不可
周	41.3%	0.9%	57.0%	0.9%
葉	22.5%	4.8%	50.1%	22.7%
劉	13.4%	3.0%	45.4%	38.0%

- ※「同誤」：対照本の同個所は夏振字本と同じように誤っている。
「誤にして不同」：対照本の同個所は誤っているが、夏振字本とは異なる。
「正確」：対照本の同個所は正確である。
「比較不可」：対照本のテキストが改変されたため、同個所は見当たらない。

まず、夏振字本と周曰校本について、「比較不可」の比率が極めて低い。つまり両者は、テキスト改変の個所がほとんどなく、非常に近い関係にあ

る。同じく二十四巻系統に属している事実から考えると、当然の結果である。さらに、「同誤」の比率が四割以上に達し、計 191 箇所ある。この一致率は両者の親縁関係を物語っているものの、直接の継承関係があることを裏付けるには、些か低すぎる気がする。夏振宇本と周曰校本とは極めて近い関係にあることは間違いないが、仮に夏振宇本が周曰校本の翻刻であれば、残りの六割近く、計 272 箇所の誤植は全て、翻刻時に独自に発生したものと見なさざるをえなくなる。その可能性はあるが非常に低いと思われる。言い換えれば、両者は「親子」より、「兄弟」あるいは「従兄弟」のような関係にあると考えたほうが自然であろう。

続いて、夏振宇本と葉逢春本について、「比較不可」の箇所は二割以上ある。つまり、夏振宇本の誤植のうち、105 箇所のテキスト自体は葉逢春本に存在していない。系統が異なるとはいえ、葉逢春本は夏振宇本の先行本、いわば「伯父」か「叔祖父」のような位置にあることから考えれば、この 105 箇所の誤植は、二十四巻系統内部から発生した誤植であり、二十巻系統から受け継がれたものではない。なお、「同誤」の比率は、周曰校本より半分くらい低い。これまでの研究によって、夏振宇本には二十巻系統に近い部分があると指摘されているが¹⁷⁾、その相似性よりも系統間のギャップのほうが大きい。夏振宇本は異系統の葉逢春本より、同系統の周曰校本に近いという事実が改めて証明されたことになる。

つぎに、夏振宇本と劉龍田本について、「比較不可」の比率が一番高く、四割近くになっているが、劉龍田本は簡略本であり、一部の字句が省略されていることを考えると、葉逢春本との差は数値が示すものより小さいかも知れない。しかし、簡略本とは言え、劉龍田本の「正確」の比率は葉逢春本と大した差がなく、却って「同誤」の比率が大幅に下る。簡略化される際に、もともと誤植が含まれていた字句が大量に省略され、正確な字句がより多く保存されている、という印象を受ける。いずれにせよ、劉龍田本の「同誤」の比率が一番低く、夏振宇本との関係はより遠いと考えられ

る。

夏振宇本に最も多く見られる¹⁸⁾誤植は、「阻む」を意味する「攔」を「欄」に作ることであり、計37箇所統計される。この誤植をめぐって、対照諸本の状況を下の表に示す。

	同誤	誤にして不同	正確	比較不可
周	3	0	34	0
葉	5	0	20	12
劉	0	0	17	20

周日校本について、数字の上では正確率が高いように思えるが、実際、夏振宇本には正しく「攔」に作るところを、周日校本では却って「欄」に作る箇所も、わずかではあるがいくつか見られる。このことから、周日校本と夏振宇本は、一方がもう一方を底本に誤植を修正する同時に、もともと正確なところを再び間違えた、という回りくどい解釈より、各々に同じ祖本の誤植を修正しようとしたが、それぞれ一部の誤植を見落としたり、と考えたほうが自然であろう。この場合、誤植の量が多い夏振宇本のほうが祖本のテキストに近いかも知れない。

一方、葉逢春本と劉龍田本を見ると、「比較不可」の比率が目立つ。実際、葉逢春本と劉龍田本には、「攔住去路」のような表現の使用頻度が夏振宇本より遙かに低い。「攔」を「欄」に作るという誤植は、二十巻系統から継承されたものではなく、二十四巻系統内部に多く発生したものと見なされる。

以上、誤植に対する統計データを手がかりとして、夏振宇本と他の三つの版本との関係について概観した。データから見ると、夏振宇本は周日校本と極めて近い関係にあるが、おそらく周日校本の単なる翻刻ではない。一方、葉逢春本と劉龍田本は夏振宇本との相似性が一段と低く、より遠い関係にあるであろう。

しかし、上述の観点は、統計データを見た上での印象にすぎず、更に具

体的に検証をしなければならない。次節において、個例に対する検証によって、更なる証拠を求める。

四、個例の検証

本節では、個例の検証によって、夏振宇本と周曰校本との関係について検討する。前節では、両者が極めて近い関係にあることが明らかになったが、本節では、①両者には直接的な継承関係が存在しているか、②より古いテキストを持つのはどれか、という二点を問題とする。

前掲中川新説は、【例2】によって、夏振宇本は周曰校本の翻刻であると主張している。その論点を要約すると、周曰校本には脱文があり、夏振宇本と嘉靖本においてその部分のテキストが異なる（「周脱文、夏嘉不同」）。これは、周曰校本には脱文が生じ、夏振宇本の編者が嘉靖本を参照せずに独自にそれを補ったからであり、つまり夏振宇本の底本は周曰校本である。

しかし、前述したように、【例2】に相反する例証も確認できる。まずはこれらの例証を検証していく。

【例4】

第81則「劉玄德敗走江陵」に、劉琮は曹操に降り、青州刺史の任に赴くが、曹操は後顧の憂いを断つため、劉琮の暗殺を企てた。

夏	操喚于禁囑付曰、你可引五 騎趕上劉琮、全家殺之、以絶後患。
周	○○○○○○○○、○○○○萬 ○○○○○、○○○○、○○○○。
嘉	○○○○○○○○、○○○○百 ○○○○○、○○○○、○○○○。
葉	○○○○○○○○、○○○○百輕○○○○○、○○○了、○○○○。
劉	○○○○○○○○、○○○○百輕○○○○○、○○○了、○○○○。

于禁は曹操の命令により劉琮一家を殺すために、どのくらいの軍勢を連れて行ったのか。まず、夏振宇本の「五騎」は明らかに誤植であり、「五」と「騎」の間に一字が脱落している。周曰校本は「五萬」、嘉靖本・葉逢春

本・劉龍田本は「五百」になっている。

常識から考えると、劉琮一家にはただ王威がついており、兵士や従者がいたとしてもさほどの数ではない。それを殺すのに「五萬騎」はさすがに多すぎる。ちなみに、曹操が何進を宮中に見送るときには「選精兵五百」¹⁹⁾、伏完の屋敷に討ち入りする時には「連夜點起甲兵三千」²⁰⁾、左慈を追うときには「令許褚引鉄甲兵五百人追趕」²¹⁾、曹丕が曹植を捉える時には「即令許褚領三千虎衛軍火速擒來」²²⁾ などを見れば、数百から数千人のほうが一般的であると考えられる。また、曹操が直ちに劉琮を殺さず、わざわざ彼に役職を与え、赴任の途中を狙って殺すのは、人目を避けるためである。にもかかわらず「五萬騎」を派遣するとは考えにくい。

そのため、周曰校本の編者が意図的に「五百騎」を「五萬騎」に書き換えたとは考えにくく、おそらく「五騎」を見て違和感を感じ、他の版本を参照せずに「萬」字を補ったのであろう。これは、「夏脱文、周嘉不同」であり、【例2】とは相反する例である。

【例5】

第94則「龐統詐獻連環計」に、曹操に軍船を互いに結ばせるため、龐統が曹操の元を訪れた。その龐統に、曹操は謙虚に意見を尋ねた（小字註を省略）。

夏	操曰、某知士元、望賜指示、勿吝見教。
周	○○、○聞○○乃吾師也、○○○○、○○○○。
嘉	○○、××先生乃吾師也、○○○○、○○○○。
葉	○○、弟聞吾言非×師也、○○○迷、○○○○。
劉	○○、××先生×××× ○○○迷、○○○○。

まず、葉逢春本のテキストの意味は全く読み取れず、おそらく誤植を何度も重ねた結果であろう。しかし、葉逢春本には「師也」の二文字があり、元のテキストが周曰校本や嘉靖本に近いであろうと推測される。劉龍田本

は問題の個所をほとんど省略しており、参考にはならない。一方夏振宇本では、「某知士元」と、話の途中で切れており、脱文があると思われる。周日校本と嘉靖本はいずれも意味が通るが、周日校本のテキストは夏振宇本の脱字の前の部分とおおよそ一致しているのに対し、嘉靖本のほうは夏振宇本と全く違う。つまり、この例も「夏脱文、周嘉不同」である。

以上、「周脱文、夏嘉不同」の【例2】に対し、「夏脱文、周嘉不同」の【例4】と【例5】がある。中川新説のように、一つの「周脱文、夏嘉不同」によって、周日校本が夏振宇本の底本であると判断すれば、二つの「夏脱文、周嘉不同」によって、却って夏振宇本が周日校本の底本であると言えるのではないか。この矛盾をどう解釈すればいいのか。

実際のところ、夏振宇本と周日校本とは「親子」、つまり直接的な継承関係があるという先入観を排除すれば、一見矛盾している三つの例を解釈することが可能になる。まず、「嘉靖本・周日校本・夏振宇本の三本はどれかがどれかの底本となるというのではなく、横にならぶ関係にある」²³⁾という中川旧説に戻り、3つの版本には共通の祖本が存在することを改めて認めるとしよう。その場合脱文は、祖本の段階から既に存在し、「周脱文、夏嘉不同」も、「夏脱文、周嘉不同」も、夏振宇本あるいは周日校本の編者が祖本を翻刻した際に独自に修正を入れたことによって生じた結果である。すなわち、【例2】、【例4】、【例5】に見られる脱文は、全て祖本の段階に既に存在していたものであり、夏振宇本は【例2】を独自に修正し、【例4】と【例5】を脱文のまま継承した。一方周日校本は、【例4】、【例5】を独自に修正し、【例2】を脱文のまま継承した。一言で言うと、夏振宇本と周日校本は同じ祖本を継承し、それぞれ独自に校訂を入れた、いわば「兄弟」の関係にあると考えれば、上記諸例にまつわる矛盾がなくなる。

しかし、前文で述べたように、百万字規模に及ぶ『三国志演義』の版本を検証するのに、一つや二つの例証では、信憑性のある結論に導くことができない。以下、自説を補強するために、さらにいくつかの例証を挙げておく。

【例6】

第31則「呂奉先轅門射戟」に、袁術の将・紀靈は、劉備を討つべく、軍勢を率い徐州に赴いた。

夏	紀靈起兵長驅大進、已到沛縣 東南札下營寨。
周	○○○○○駟○○、○○○○ ○○割○○○。
嘉	○○○○○○○○○、○○○○ ○○割下營寨。
葉	○○軍馬○○○○、○○○○於○○下住寨柵。
劉	○灵××××××× ○○○○ ○○×○×○。

夏振字本は、誤って「扎」を「札」に作る。木偏と手偏を混同する誤植はよくあるが、ここで注目したいのは、周曰校本と嘉靖本が、「扎」と相通じる「割」に作ることである。「扎」と「割」はともに異体字であると考えてもよいが、夏振字本の「札」という誤植の元の字は「扎」であり、「割」ではない。つまり、夏振字本の底本は「扎」か「札」でなければ説明がつかない²⁴⁾。一方、周曰校本と嘉靖本が「割」に統一しているところを考えると、やはり両者の共通の祖本は「割」になっていたと推定される。とすると、夏振字本の底本と、周曰校本・嘉靖本共通の祖本とは異本である可能性も考えられる。

【例7】

第82則「長坂坡趙雲救主」に、趙雲は阿斗を抱え、敵陣を突破しようとする、四人の将に囲まれた。

夏	後面趕的是馬延張颯、前面阻的是焦觸張南、皆是袁紹手下降將。
周	○○趕○○○○○鎧、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○。
嘉	○○××○○○○鎧、○○×××○○○○、○○○○○○○×將。
葉	背後×○○○○○○、○○×○○張尚墨觴、○○○○○○○×○。
劉	背後×××○○○○趕來、○○×××張尚墨觴 ×××××××× 攔擋。

この四人の姓名は正確に何であろうか。『三国志』によると、四人とも実

在の人物である。『魏書』・「武帝紀」には、「(袁)尚夜遁，保祁山，追擊之。其將馬延、張覲等臨陳降，衆大潰」²⁵⁾とあり、さらに、「袁紹伝」には、「(袁)熙、尚為其將焦觸、張南所攻，奔遼西烏丸」²⁶⁾とある。つまり、四人の姓名について、夏振宇本は全て正確で、周日校本・嘉靖本には一箇所誤植があり（張鎧）、葉逢春本・劉龍田本には二箇所ある（張尚墨觴）。

周日校本と嘉靖本は「同誤」であり、共通の祖本の段階で既に「張鎧」となっていたであろう。一方夏振宇本は正確であり、それが他に「張鎧」に作る版本を継承しているのか、それとも独自に修正したのか。いずれにせよ、【例6】と同じように、夏振宇本と周日校本・嘉靖本との間には隔たりがあり、夏振宇本のテキストには、より古い葉逢春本に近い部分がある。

【例8】

第127則「孔明定計捉張任」に、劉備は、まもなく張飛と諸葛亮という二つの援軍が来ると知り、再び雒城を攻める計画を立てた。

夏	……南門二帶是山路、北門	有涪 <small>音</small> 水、因此不圍。
周	……○○××○○○、○○	○○○○、○○○○。
嘉	……○○××○○○、○○	○○×○、○○○○。
葉	……○○××○○○、○○	是水路×○×○、○○○○。
劉	……×××××××、○○	是水路××××、××○○。

夏振宇本の「二帶」という言葉は明らかに「一帶」の誤りである。一方、周日校本・嘉靖本にはこの二文字が見られない。以下の理由により、「二帶」は夏振宇本の編者が独自に入れたものとは考えにくい。

①「南門是山路、北門有涪水」という表現はもともと意味が通っており、言葉のリズムもよい。「一帶」を入れることは全く意味がないし、そのリズムをくずすことにもなる。

②夏振宇本の編者が①を顧みずに、あえて「一帶」を入れたとしても、わざわざ入れた表現なのに、よりによってそこで「二帶」という筆の誤り

を犯したとは考えにくい。

「二帯」は夏振宇本の編者が添加したものでないとすれば、夏振宇本の底本には「一帯」という言葉が存在し、夏振宇本がそれを継承する時に誤って「二帯」にしたと考えられる。すなわち、夏振宇本の底本は、周日校本・嘉靖本の共通の底本とは異なる版本であろう。

【例 9】

第 138 則「耿紀韋晃討曹操」に、許昌で起きた政変を鎮圧した後、曹操は自分に反対する者を根絶するため、官僚全員を自分の本拠地である鄴郡に連行した。

夏	夏侯惇將五家老小宗族皆斬於市。王必箭瘡發 而死。 將百官起 赴鄴群。
周	○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○鎗○ ○○。 ○○○○ ○○那。
嘉	○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○ ○○。 ○○○○ ○○郡。
葉	○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○ ○○。惇○○○○發○○×
劉	××××××××××××××××。○○○○進裂○○。惇○○○解 ○○郡。

ここで問題になるのは、曹操の本拠地である鄴について、夏振宇本で「鄴群」、周日校本で「鄴那」と、それぞれ誤っていることである。「群」は、「郡」の誤りであり、「那」の誤りでないことは明らかである。そうすると、「群」に作る夏振宇本の底本は、「那」に作る周日校本ではなく、やはり「郡」に作る別の版本であると考えたほうが自然であろう。

【例 10】

第 148 則「關雲長水淹七軍」に、関羽の水攻めを受け、小舟に乗って逃げようとする龐徳の目の前に、関羽の将・周倉が現れた。

夏	上流頭一將撐 船持大筏而至、 將小船撞翻。
周	○○○○○○○一大○×××○○、 ○○舡○○。
嘉	○○○○○○○一大○×××○○、 ○○舡○○。

葉	○○○○○驅××××○○○來、當頭一衝、把○○衝○。
劉	×××周倉驅××××○○○來、當頭一衝、把○舟○番。

ここで問題となるのは、周倉が何に乗って龐徳が乗る小舟を突き倒したのかという点である。周曰校本と嘉靖本では「大船」、葉逢春本と劉龍田本では「大筏」にそれぞれ作り、どれも意味が通っている。しかし夏振宇本の「撐船持大筏」は全く理解できない。周倉は同時に「撐船」しがなら「持大筏」することは勿論できない。夏振宇本のテキストは、むしろ「大船」と「大筏」を何らかの理由で混同したように見える。とすると、夏振宇本は二十巻系統と二十四巻系統の中間段階の特徴を帯びていることになる。

【例 11】

第 237 則「姜維一計害三賢」に、蜀での反乱で姜維と鐘会が殺害された後、鄧艾父子もやがて殺されることになった。(葉逢春本欠巻のため、双峰堂本を引用する)

夏	被田犢一刀、鄧艾父子死於亂軍之中。
周	○○○○指、○○××○○○○○○。
嘉	○○○○指、×○○○○○○○○。
双	○○續○○斬之、×××××××××× <small>其子鄧忠亦被亂軍所殺。</small>
劉	○○○○○砍死、×○○○○○○○○。

まず、この人物の姓名は、正しくは「田續」である(『三国志』「鄧艾伝」)。双峰堂本以外の諸本はすべて「田犢」に作り、おそらく相当早い段階で誤っていたであろう。それはさておき、鄧艾を殺したのは、双峰堂本では田續本人で、周曰校本・嘉靖本では田續部下の兵士であり、どれも意味が通る。しかし、夏振宇本と劉龍田本では、田續が鄧艾を刀で斬り殺した後に、「鄧艾父子死於亂軍之中」という表現があり、つまり鄧艾が二回殺されることになる。【例 10】と同じように、夏振宇本は、二十巻系統と二

十四卷系統の中間段階の特徴を帯びていると考えられる²⁷⁾。

以上、本節では、データ統計と個例分析を併用し、夏振宇本と周曰校本との関係をはじめ、夏振宇本が二十四巻系統に占める位置づけを検証した。その検証によって、以下の事実が明らかになる。

- 1) 夏振宇本には、周曰校本の誤りとは異なる誤植が多く見られる。つまり、夏振宇本は周曰校本の翻刻ではない。
- 2) 夏振宇本には、二十巻系統と二十四巻系統のテキストを混同したものが見られる。その底本は、現存していない二十巻系統と二十四巻系統の中間段階の特徴をもつ版本であると考えられる。
- 3) 夏振宇本には、周曰校本・嘉靖本より古い特徴が多く見られる。それによって、夏振宇本の底本は、周曰校本・嘉靖本の共通の祖本より古いかもしれない。

五、おわりに

本稿は、先行研究を踏まえ、『三国志演義』夏振宇本が周曰校本の翻刻であるかどうかという問題を再考するとともに、二十四巻系統における夏振宇本の位置づけをめぐる検証を行った。その結果、夏振宇本の底本は周曰校本ではなく、二十巻系統と二十四巻系統の中間段階の特徴を持つより古い版本であり、そのため、成立時期が遅いものの、周曰校本より古い部分があることが判明した。

夏振宇本がより古い特徴を帯びる一方、後継者である百二十回諸本の底本になることは、先行研究によって既に指摘されている²⁸⁾。すなわち、より古い版本を継承し、後の李卓吾本ないし毛宗崗本を生み出したのは、嘉靖本でも周曰校本でもなく、夏振宇本が所属する分支であると考えられる。その意味で、夏振宇本こそ、二十四巻系諸本を代表できる版本ではあるまいか。二十四巻系諸本における夏振宇本の位置づけを再考することによ

て、これまで十分に認識されてこなかった夏振宇本の版本学上の価値を改めて確かめることは、本稿の目的の一つである。

本稿では、主に夏振宇本と周日校本との関係を取り上げたが、その他、周日校本と嘉靖本との関係、夏振宇本と嘉靖本との関係、および本稿で触れなかった夷白堂本の位置づけ、二十四卷系統と二十卷簡本系統・二十卷繁本系統とのつながりなど、まだ解明されていない課題は多く残されている。四十種近くある『三国志演義』の版本全体の系譜を描くには、まだほど遠いと言わざるをえない。既に多く蓄積されている先学の成果を受け継ぎ、『三国志演義』版本関係を完全究明することを今後の課題としたい。

注

- 1) その代表的な著書には、金文京氏の『三国志演義の世界』（東方書店、1992年）、魏安氏の『三国演義版本考』（上海古籍出版社、1996年）、中川論氏の『『三国志演義』版本の研究』（汲古書院、1998年）、劉世徳氏の『三国志演義作者與版本考論』（中華書局、2011年）、井口千雪氏の『三国志演義成立史の研究』（汲古書院、2016年）などが挙げられる。また、小川環樹・金文京・井上泰山・章培恒・上田望・中川論・陳翔華諸氏によりも、多くの論考が著されている。
- 2) 前掲『『三国志演義』版本の研究』による。
- 3) 夏振宇本の状況に関しては、陳翔華氏編纂の影印本『日本蔵夏振宇本三国志傳通俗演義』（国家図書館出版社、2010年）巻首の解説、及び拙稿「關於蓬左文庫所蔵夏振宇本『三國志演義』～江戸日本の漢籍傳播之一例～」(復旦大学日本研究中心『日本研究集林』2017年下半年刊)を参照。
- 4) 「内容文字、并同周日校本、當從周日校本出」（孫楷第『中国通俗小説書目（重訂版）』、人民文学出版社、1982年、37頁）。
- 5) それぞれ二十卷簡本系統・二十卷繁本系統を指す。
- 6) 上田望『『三国演義』版本試論——通俗小説の流伝に関する一考察——』（東洋文化71、1990年）。
- 7) 前掲『三国演義版本考』101頁を参照。
- 8) 前掲『『三国志演義』版本の研究』75頁を参照。以下、この説を「中川旧説」と呼ぶ。
- 9) 中川論「夏振宇本『三国志傳通俗演義』について」（『三国志研究』第八号、2013

- 年)を参照。以下、「中川新説」と呼ぶ。
- 10) 【例1】は、前掲上田論文から引用。ただし、上田氏は24種もの版本を引用したが、本稿の目的はこれら全ての版本の検証ではないため、ここではその代表的な版本のみを引用する。また、この論文が著された1990年に、現在大いに注目されている葉逢春本や朝鮮覆刻周日校本はまだ広く取り上げられていなかったため、引用されていないが、二書を調べると、本稿で取り上げる上田氏の論点に相反する例証がないため、論証自体に特に差し支えないことを断っておく。
 - 11) 【例2】及びその解説は、前掲中川論文(2013)から引用するが、便宜を図り、引用される原文の書式を変えている。なお、解説部分の下線は筆者が添加したものである。
 - 12) 魏安『三国演義版本考』19頁。
 - 13) この点は、魏安氏の観点(『三国演義版本考』101頁)に近いが、逆に【例2】を解釈できなくなるため、おそらくやはり上田説・中川旧説のように、夏振宇本と周日校本とは平行関係にあると考えたほうが妥当であろう。
 - 14) 前掲拙稿「關於蓬左文庫所藏夏振宇本『三國志演義』～江戸日本の漢籍傳播の一例～」。
 - 15) 以下、夏振宇本と一致する字は○、夏振宇本にない字は×、夏振宇本と異なる字はそのまま示す。また、対照しやすいように、適宜、空白を入れる。
 - 16) なお、第104則「趙子龍智取桂陽城」に登場する架空人物である鮑隆については、「龍」に作る個所もあるが、諸版本に通してほとんど「隆」に作るため、「龍」を誤植とする。
 - 17) 前掲上田論文を参照。
 - 18) 225則全体において「孫緝」を「孫琳」に作るのを除く。
 - 19) 第5則「董卓議立陳留王」。
 - 20) 第133則「曹操杖殺伏皇后」。
 - 21) 第135則「魏王宮左慈擲盃」。
 - 22) 第157則「曹子建七步成章」。
 - 23) 中川論『『三國志演義』版本の研究』75頁。
 - 24) 「製版者が「札」の方こそ正しいと思ってわざと書き換えた」や、「製版者が理由もなく「劓」を「扎」に書き換えようとしたが、誤って「札」と彫った」など、可能性が極めて低い考え方を排除する。
 - 25) 晋・陳寿撰、南朝宋・裴松之註『三国志』(中華書局排印本、2009年)第15頁。
 - 26) 『三国志』排印本第126頁。
 - 27) その特徴は、劉龍田本にも見られる。したがって、劉龍田本を代表とする二十

卷簡本系も、二十卷系統と二十四卷系統の中間段階にあるではないかと考えられる。これは、井口千雪氏の『三国志演義成立史の研究』の見解に近い。

- 28) 前掲諸氏は、夏振宇本の成立までの過程について主張が分かれるが、李卓吾本をはじめ、百二十回諸本の祖本が夏振宇本に近いことについては異見を述べていない。